

人のために豊かさや便利さを提供する
土木を、生活のなかに浸透させていくこと。
「DOBOKU×カルチャー」
では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、
そんなコンテンツを紹介します。

第23回 『浮世絵⑤』

～隅田川に架けられた橋梁

東京から江戸へ。江戸時代、明治、大正～平成、令和にかけて都内各所には、江戸から変わらない景色を見ることができるスポットがある。中には浮世絵に描かれたままの風景も残っており、まるでタイムスリップしたかのような気分を味わえる。広重、写楽、歌麿が見たであろう景色。今回は、人々の生活に欠かせないインフラの1つ「橋梁」に注目しよう。

歌川広重作「名所江戸百景」より『両国橋大川ばた』。橋を通行する人々、川岸の店に集まる人々、そして川向こうで過ごす人々まで丁寧に描画されている群衆の画づくりが、当時の橋周辺の活気をよく表している(所蔵:国立国会図書館)



江戸も今も変わらない「橋のある風景」

水の都にとって今も昔も橋梁はなくてはならないインフラ施設である。江戸時代、幕府は多くの資金を費やし、下町の川や堀に橋を架けた。しかし、隅田川となると別である。幕府は防備の面から架橋に積極的というわけではなかった。今では多くの橋が架かる隅田川も江戸時代に架けられたのは、千住大橋、両国橋、新大橋、永代橋、吾妻橋のわずか5つだった。数少ない橋には多くの人が集まり、その重みで橋が壊れるほどにぎわったという。多くの浮世絵師も江戸の橋を構図の中心に据え、ダイナミックに描いた。今回は、5つの橋の中から「両国橋」と「吾妻橋」を紹介する。

何度も困難を乗り越えた両国橋

隅田川に架かる橋には、同じデザインの橋は1つもない。また、それぞれに名前がついているように、それぞれにストーリーを持っている。江戸市民が待ち望んで架設された両国橋も例外ではない。

架橋されたのは1659(万治2)年。江戸の過半を焼失させた明暦の大火がきっかけだった。「火事と喧嘩は江戸の華」という言葉があるほど火事が多かった江戸時代。昼夜問わず起きており、大きな社会問題となっていた。そして最大の被害になったのが「振袖火事」で知られる明暦の大火だった。橋がなく逃げ場を失った江戸市民の命が多数奪われた。この事態を重く受け止めた幕府は、武家屋敷用地・火除地設置のための町

の移転用地にあてるため開発を進めた。その手始めとなったのが、現在よりも50mほど南に架設された両国橋だった。

当時、武蔵国と下総国の2つの国にまたがっていたことから名付けられたという両国橋だが、上流が「荒川」と名付けられるほど暴れ川だったため、流されては架け替えられるなど数奇の運命をたどった。幕府は、「両国橋懸直奉行」を設置し、橋材の調達から運搬、そして施工までを大名に命じた。資金も含めてすべて大名がまかなわなければならなかったため、大きな負担となっていた。橋を強固にするために橋脚の数を増やしたり、素材を見直したりしたため橋材の調達は次第に困難を極め、調達が間に合わなかった大名が流罪になるなどの事態も起こっていたという。

架け直した後は、橋の維持・管理に万全を期した。橋のたもとには橋番所が置かれ、番人を当番制にし、橋の保護にあたった。こうした努力や施工力の向上により幕末期になると、少しずつ被害も軽減されていった。

念願かなって架け替えられた両国橋には、多くの江戸市民が詰め



現在の両国橋。1904年に鉄製の橋に架け替えられる際、現在地に移っている。川岸の公園が整備されており、両国駅をはじめ浅草などの東京の有名観光地にほど近く、散策すると気持ちいい場所だ。

かけた。武士は屋形船に乗り、それを見た江戸っ子たちは小船を浮かべ遊覧を楽しんだ。また、橋のもとには見世物小屋や水茶屋、食べ物屋などが軒を連ね、多くの人でにぎわった。夏には、全国的な凶作や疫病流行の退散祈願を込めて花火があげられると、以後川開きの余興として花火が夏の風物詩とな

った。

両国橋は、1904年（明治37年）に鉄製の橋に架け替えられる際、現在地に移った。現在の橋は昭和7年に架け替えられたものだが、今も欠かせないインフラとしてこの地で都民の暮らしを支えている。



歌川国貞(初代)作「吾妻橋夕涼景」。現代でもおなじみの浅草の屋形船の当時の姿をダイナミックに描いている。美人画でも活躍していた国貞らしい1枚である(所蔵:国立国会図書館)

民間の底力で架橋された吾妻橋

地下鉄浅草駅を出るとすぐに鮮やかな朱色の橋が目飛び込んでくる。江戸期最後に架けられた吾妻橋である。浅草雷門のほど近く、多くの観光客がその橋で隅田川を眺め写真を撮る。橋の色は違うが、江戸っ子たちもこうしてこの場所から隅田川を眺めていたのではないだろうか。

吾妻橋は、民間の出願によって1774年（安永3年）に架けられた木造の橋である。幕府からは、万が一橋が壊れて下流の両国橋に影響が出た場合は、その修築費用を負担することなどの厳しい条件が課せられたが、立派な橋脚を完成させた。以降、大きな被害が少なかったことから民間の施工力をうかがい知ることができる。幕府は当時、隅田川を「大川」と呼んでいたことから「大川橋」と命名したが、庶民からは「吾妻橋」と呼ばれ愛された。明治期に架け替えられた際、正式に「吾妻橋」となった。

民間の力で架けられた吾妻橋だったが、武士や僧侶は無料で通行することが許されたのに対し、庶民は橋の維持費などを目的とした「橋銭」という通行料を徴収させられた。それでも橋には多くの人が詰めかけた。歌川国貞（初代）の「吾妻橋夕涼景」にも屋形船に乗る芸者らしき女性たちの背後に橋が描かれ、多くの江戸市民が詰めかけているのを見ることができる。多くの人詰めかければ、喧嘩する人や橋から身投げする人などのトラブルも絶えず起こ

った。両国橋と同様に橋のもとには「橋番所」が置かれ、橋番がその対応にあたった。

明治時代に入ると、近代化により道路や橋梁の改善が急務となった。木製が多かった橋は、鉄の導入やトラス橋の登場によってより強固になった。1887年（明治20年）には、隅田川では初めて吾妻橋にトラス橋が採用されたが、床が木造だったこともあり、関東大震災で焼失してしまう。一度は修復されるが、1931年（昭和6年）に錢高組の施工によって現在の橋が架設された。

江戸時代に橋番所があったところには現在、交番がある。時代は違えど、橋のもとから街の治安を守っている。



現在の吾妻橋。下町らしく江戸時代の雰囲気を残した朱色に塗られており、かの有名なアサヒビール本社隣のスーパードライホール「炎のオブジェ」が望めるランドマーク的なスポットとなっている。

【参考文献】
鈴木理生「江戸の橋」三省堂、2006年
大濱徹也、吉原健一郎「増補版 江戸東京年表」小学館、2002年
善養寺ススム「絵で見る江戸の町とくらし図鑑」廣済堂出版、2011年
「幕末維新 江戸東京史跡事典」新人物往来社、2000年
「江戸東京学事典」三省堂、1987年、1988年